

2005年度JICA湿地保全研修コースの実施

2005年5月18日(水)から7月8日(金)まで、JICA集団研修「湿地における生態系・生物多様性とその修復・再生及び賢明な利用」研修が、JICA帯広国際センターを研修実施機関、環境省自然環境局及びKIWCを受け入れ機関として実施されました。

2回目の集団研修となる今年度は、6カ国(コロンビア、ラオス、ネパール、オマーン、タンザニア、タイ)より環境保全や自然保護に係わる研究者や中堅行政官6名が参加しました。北海道の釧路湿原で始まった自然再生事業から、沖縄のサンゴ礁やマングローブ湿地の生態系保全のための取り組みまで、日本列島を縦断しながら、多種多様な環境における湿地の保全・自然再生の事例について学びました。また、研修員は環境教育やエコツアーなど、湿地の自然資源の持続的な利用方法に関するさまざまな実習にも参加しました。

研修員達は滞在中、釧路の一般家庭を訪問するホームビジットや、エコツアーや環境保全について学んでいる大学生との討論など、さまざまな市民との交流の機会にも恵まれました。



2005年度JICAエコツアー研修コースの実施

2005年8月29日(月)から9月30日(金)まで、JICA「自然公園の管理・運営と利用研修」がJICA帯広国際センターを研修実施機関、KIWCを受け入れ機関として実施されました。集団研修として3回目となる今年度は、6カ国(ボスニア・ヘルツェゴビナ、キルギス、モンゴル、ネパール、ルーマニア、タジキスタン)6名の、観光や環境保全に係わる中堅行政官を迎えました。研修では東北道各自然公園のほか、鹿児島県の屋久島にも足をのぼし、エコツアープログラムの体験実習や、自然公園制度、エコツアー理念、環境教育現場の視察などを行いました。また、浜中町立霧多布中学校への訪問や、北海道立標茶高等学校で進められている湿原再生事業の視察など、若い世代との意見交換の機会もありました。

研修員はこれらのプログラムを通して学んだことを活かして、自国におけるエコツーリズム導入と活用のためのアクションプランを企画し、研修の最後に発表しました。



KIWC専門家のメキシコ派遣

2005年11月7日(金)から12月10日(土)まで、KIWCの湿地保全の専門家がメキシコを訪れました。リア・セレストン生物圏保護区において、JICAが実施中の「ユカタン半島湿地保全プロジェクト」に必要な「モニタリング手法」の指導のため派遣されました。フラミンゴの生息するこの保護区を保全するために不可欠な「地域住民の保全活動への参加と、『賢明な利用』の普及啓発」を実現させるための具体的な活動として、住民参加型の環境モニタリング調査を実施すべく、予備調査や調査項目の検討、住民グループとの意見交換や現地関係者への指導などをおこないました。

KIWC専門家のマレーシア派遣

2006年1月23日(月)から2月4日(土)まで、KIWCの湿地保全の専門家をマレーシアのセガマ河下流域およびタビン野生生物保護区に派遣しました。JICAの進める湿地保全管理のプロジェクトの一環として、現地調査と技術指導のため現地を訪れたものです。

この地域に広がる広大な湿地帯の保全について、将来のラムサール条約への登録を念頭においた、同条約の理念に基づく「賢明な利用」を進めるため、現地担当官を対象にした勉強会や、エコツアー等「湿地の賢明な利用」の具体的なプログラム案を検討するセミナー等を実施しました。

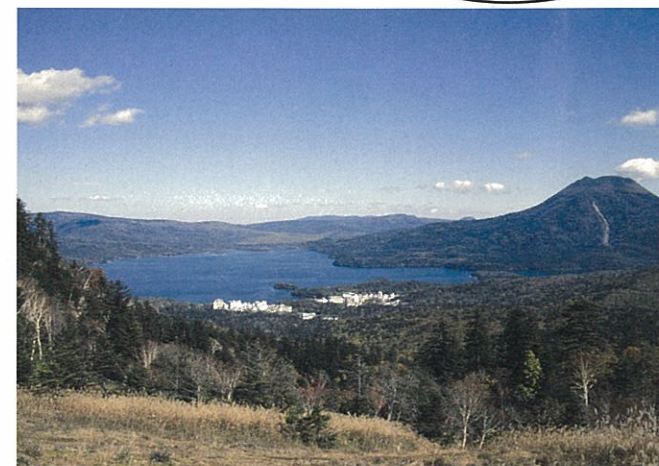
日本のラムサール条約登録湿地 シリーズ14 ～阿寒湖～

北海道東部の釧路市にある二つの活火山、雄阿寒岳(1370m)と雌阿寒岳(1499m)にはさまれた阿寒湖は、これらの火山の活動によりつくられた、周囲25.9km、面積1300haのカルデラ湖です。湖の標高は420mで、周囲にはエゾマツ、トドマツなどの針葉樹と、ミズナラ、カツラなどの広葉樹が混在する深い森林が広がり、ペンクート、パンクートなどの湖沼が点在しています。阿寒湖を含む一帯は阿寒国立公園に指定されており、「火山と森と湖」のおりなす自然や温泉を楽しむため、国内外より多くの観光客が訪れています。

阿寒湖の水深は平均18.7m、最深で42mあり、日本最大の淡水魚であるイトワカフシシユガイ(貝)など、多くの希少な水生動植物がみられます。なかでも、球状の塊をなして生育する藻類であるマリモは有名で、緑のピロッドで作ったような、美しい球体となったものは、世界中でも阿寒湖でしかみられません。マリモの大きさは10～20cm、中には30cmを超えるものもあり、国の特別天然記念物に指定されています。マリモに代表される多くの希少な動植物の生息地として、また、日本を代表するカルデラ湖として、2005年11月にラムサール条約登録湿地となりました。

湖周辺の山林は、100年にわたり個人所有地として林業が営まれてきましたが、現在、その所有を受け継いだ自然保護財団が設立され、ヒグマやクマゲラが生息する、豊かな森林環境を維持するための管理運営がおこなわれています。

(釧路市環境政策課)



(写真提供: 阿寒湖畔エコミュージアムセンター)

釧路地域に新たな
ラムサール条約登録湿地が
誕生しました!



KIWC newsletter

CONTENTS

観察会・エコツアーの実施	----- 1
KIWC技術委員会の活動	----- 1
設立10周年記念事業	----- 2-3
JICA(国際協力機構)関連の事業	----- 3-4
ラムサール条約第9回締約国会議への参加	----- 3
日本のラムサール条約登録湿地	----- 4

2005年11月、釧路地域に新たなラムサール条約登録湿地が誕生しました。KIWCも設立後10年を経て、湿地保全のための普及啓発と国際協力活動をさらにすすめていきます。

「国際ツルフォーラム交流会」より



2005年度河川環境観察会の実施

(財)河川環境管理財団・河川整備基金助成事業として、2005年度も河川環境観察会を実施しました。今年を対象を一般市民(大人)と、児童とに分け、2回開催しました。10月10日(日)におこなった一般向けの観察会では、釧路川の源流域である屈斜路湖周辺の環境をラフトボート上から観察しました。続いて訪れた塘路湖畔で、カードゲームを通して、タンチョウの生息に適した環境条件について学んだあと、カヌーを使った釧路川中流域の自然環境を観察し、上流の様子と比較しました。天気にもめぐまれ、外国人3名を含む19名の参加者は、河川環境について楽しく学ぶ秋の一日をすごしました。

11月3日(木)には、児童を対象とした観察会をおこないました。釧路湿原こどもレンジャー27名を含む31名が参加し、塘路湖畔での自然観察ハイクや、地引網漁などに参加しました。皆で力をあわせて引き上げた網には大きなコイから体長数センチのトゲウオまでさまざまな魚がかり、子供達から歓声があがりました(これらの魚は観察後に放流しました)。さらに湖畔から釧路川をカヌーで下り、河畔の生き物や水の流れの様子を観察しました。

冬の湿原エコツアー「歩くスキー&雪の結晶観察」の実施

2006年2月25日(土)に温根内ビジターセンターを会場に冬の湿原を楽しむエコツアーを開催しました。釧路地域在住の市民9名が参加し、午前中は温根内ビジターセンターの若山公一指導員の案内のもと、歩くスキーを楽しみました。雪の無い季節には入ることのできない林の中や木道などから、キツツキなどが穴をあけた樹木や、タンチョウ・ユキウサギ・ヤチネズミなどの動物の足跡や食痕、ヤナギの冬芽などを観察しました。

午後からは、釧路学園高校の柳敏教諭より、雪の研究の歴史や雪ができる仕組みについて解説が行われました。実際にペットボトルを利用した雪の結晶作り実験を行い、結晶が鳥の羽毛のような形に成長する様子を観察しました。また、偏光ガラスシートを使用した氷の結晶構造観察を行いました。参加者は、販売されている氷と自然にできた氷の結晶構造の違いに驚きながらも、きれいな造形に見入っていました。

参加者は普段あまり接することのない冬の湿原で、新たな発見・興味を持って学び、豊かな自然を楽しみました。

2005年度技術委員会フィールド事例研究会の実施

技術委員会は2005年8月2日(火)に、「湿地の保全と賢明な利用のための広報・教育・普及啓発」について、フィールド事例研究会を開催しました。オブザーバー、スタッフを含む16名が霧多布湿原センターを訪れ、同センターで実践されている環境教育・普及啓発プログラムの視察・体験を行いました。

最初に、技術委員でもある伊東俊和館長をはじめとする、NPO法人霧多布湿原トラストのスタッフより、同センターの運営・活動の概要や、実施されている「学校と連携した環境教育」「地元素材・人材を活かした環境教育」「エコツアー」プログラム例について説明をうけました。その後、実際にフィールドでの「湿原探検ツアー」を体験しました。動植物・水辺環境の観察や、手作りの野外遊具体験などの事例検討を行い、意見や情報を交換しました。

センターの環境教育プログラム「魚の観察」の紹介場面では、参加者自身に作成体験をさせている釣竿の材料「スズタケ」が、実は、道東ではこの地域のみに生えていることが、委員からの指摘で判明しました。プログラムに思わぬ「特産」の付加価値が追加された一方、各委員もセンターの随所でみられた様々な工夫やアイディアに触発された様子でした。



KIWC設立10年記念事業

今年度は、1995年1月に設立されたKIWCの設立10年事業として、釧路地域における自然環境の象徴的な存在である「ツル」をテーマとした、地域住民向けのフォーラムや作品展を実施しました。これらのイベントには、多くの市民に加え、この10年間の活動をつうじて協力関係を築いてきた、海外各国からも参加をいただきました。

国際ツルフォーラム「ツルと私達の未来」の開催

2006年3月18日(土)、釧路市観光国際交流センターにて、「国際ツルフォーラム〜ツルと私達の未来」が、JICA帯広国際センター、タンチョウ保護調査連合との共催により開かれ、約100名の市民が参加しました。

開催協力団体である日本ツル・コウノトリネットワークの代表を務める、井上雅子・釧路市動物園ふれあい主幹による基調講演をはじめ、海外事例の発表やパネルディスカッションなど多彩なプログラムをつうじて、東アジアにおけるツルの保護と教育・普及に関する取り組みが紹介されました。

講演者の一人であるキム・ジンハン・韓国国立生物資源センター上級研究官は、KIWCが手がけた最初のJICA集団研修「湿地及び渡り鳥保全」コースの参加者でもあり、現在は韓国国内のツル保護のキーパーソンとして活躍されています。

このフォーラムには、ツルの保護について学ぶためブータンより来日中のJICA研修員も参加しました。引き続き行われた交流会では、北海道ブータン協会釧路支部によるブータンの自然・文化を紹介する写真や民族衣装が会場を彩るなか、JICA研修のライドショーも行われました。参加者達は日・中・韓・ブータンの茶菓を楽しみながら、なごやかなひとときを楽しみました。

また、翌日19日(日)には、フォーラム講師やブータンからのJICA研修員など関係者を対象としたスタディーツアーを実施しました。阿寒国際ツルセンターにて環境教育プログラムを体験し、楽しみながらツルの生態について学ぶ工夫について討議しました。その後訪れた鶴居伊藤タンチョウサンクチュアリでは、住民参加によるツルの保護活動が紹介され、ツルと人間との共存について、各国の事情を紹介しながらの意見交換がおこなわれました。



交流会の様子

「国際ツル作品展」の開催

2006年3月18日(土)および3月29日(水)から4月2日(日)にかけて、「国際ツル作品展」を開催しました。「ツル」をテーマに、ジャンルを問わない手作りの作品を公募したところ、釧路地域を中心に幼稚園生から社会人まで幅広い年代の市民より、400点近い絵画、書道、工芸、手芸などの素晴らしい作品が寄せられました。

これらの作品に加え、ブータンの児童によるツル絵画をはじめとする、イギリス、ロシア、オーストラリア、韓国の絵画、写真、パッチワークなどに解説を添え、一堂に展示しました。

3月18日は釧路市観光国際交流センターで開催された「国際ツルフォーラム」会場でも展示を行いました。個性豊かに表現された「ツル」達は、フォーラム参加者の目を楽しめるとともに、釧路地域の湿地生態系を象徴するツルが、いかに地域の人々にとって身近な存在であるかを強く印象付けました。

3月29日から4月2日の期間は釧路市生涯学習センターにて作品展を開催し、たくさんの人々が訪れました。会場では展示されている海外の国々と釧路地域とのつながりに関する質問などもよく寄せられ、作品をじっくり鑑賞する人が多かったのが印象的でした。



「国際ツル作品展」出品作品より

プログラム

基調講演

「タンチョウの保護と教育・普及活動の取り組み」
井上雅子氏
(釧路市動物園ふれあい主幹)

事例発表

「東アジアのツル保護と教育・普及の取り組み」
ブータンからの報告：
百瀬邦和氏
(タンチョウ調査保護連合 代表)
韓国からの報告：
キム・ジンハン氏
(韓国国立生物資源センター 上級研究官)
中国からの報告：
シンバ・チャン氏
(北東アジア地域ツル類重要生息地ネットワーク
フライウェイオフィサー)

パネルディスカッション

パネリスト：
上記講演者4名
佐竹直子氏
(ボランティアネットワークチャレンジ隊 代表)
コーディネーター：
新庄久志
(釧路国際ウェットランドセンター主幹)



左から3人目がキム・ジンハン氏



「国際ツルフォーラム」会場での開催風景



釧路市生涯学習センター会場での開催風景



海外より贈られた作品も多数展示

JICA地域提案型草の根技術協力事業

2003年度より3か年の計画で実施されてきた、ブータンのオグロツル保護に関するJICA(国際協力機構)地域提案型草の根技術協力事業は、2005年度が完結の年となりました。これまでに4名のブータン王立自然保護協会(RSPN)職員を道東に招き、普及啓発のためのビジターセンターの運営手法や環境教育プログラム、エコツーリズムの活用方法等について研修を実施してきました。

今年度はこれまでに伝えた技術を地域に根付かせ、今後さらに発展させるため、ツル専門家の派遣と、ツル生息地域の行政関係者も対象とした研修を実施しました。

●ツル専門家のブータン訪問

2005年11月22日(火)から2006年1月10日(火)まで、タンチョウ保護調査連合代表の百瀬邦和氏をJICA専門家としてブータンに派遣しました。

百瀬氏はオグロツルの越冬地であるフォブジカ谷にて、現地スタッフと地域住民による調査グループをたちあげ、ツル飛来数のカウント調査や、行動調査を実施しました。この時カウントした飛来数(355羽)が、2005年度冬の飛来数の公式記録となりました。さらに、ツルを捕獲して、渡りのルートや行動の詳細について調べるための、足環標識と発信機を装着しました。百瀬氏の帰国後にも、指導を受けた現地のスタッフがこれらの調査をひきつづき、さらなるツルの標識・発信機取り付けに成功しています。

これらの成果や専門家の目でもみたフォブジカ谷のツル生息地の環境について、2006年3月に開催された「国際ツルフォーラム」で百瀬氏本人による発表がおこなわれ、今後のプロジェクト課題だけでなく、日本におけるツルとの共存の「あるべきすがた」についても話がおよびました。

●研修の実施

2006年3月3日(金)から3月20日(木)にかけて、「フォブジカ谷におけるオグロツル生息地の保全にかかわる環境教育等の実施・運営」研修を実施しました。今回は関係する行政区の首長、担当行政官およびRSPN職員からなる4名が参加しました。

研修員はタンチョウ生息地である釧路湿原をはじめとする道東の湿地を訪れ、各自然観察・展示施設で実施されている普及啓発・環境教育プログラムを実際に体験しました。また、ツルに象徴される豊かな自然資源を活用したエコツアーなど、地域の発展とツルの保護を両立させるのに役立つ事例についても学びました。さらにこれらのプログラムをフォブジカでの活動で活用するための応用方法などについて検討をかさねました。

研修員は3月18日(土)に開催された「国際ツルフォーラム」、また翌日のスタディーツアーにも参加し、日本・中国・韓国におけるツルの保護と環境教育の取り組みについて、各国の専門家と討議をおこないました。

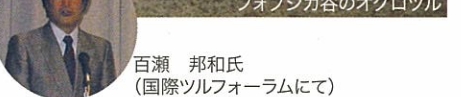
厳寒の中のフィールドワークも多く、研修員にはハードな日程でしたが、北海道ブータン協会との懇親会など、地域の人々のサポートを受けて、全員元気に研修を終えることができました。

ラムサール条約第9回締約国会議へのポスター参加

2005年11月8日(火)から15日(火)に、ウガンダの首都カンパラにて、第9回ラムサール条約締約国会議が開催されました。この会議中に日本の20カ所の湿地が登録され、国内の登録湿地が一気に倍以上に増えました。KIWCでは新たな登録湿地となった阿寒湖の情報を含む、釧路地域の登録湿地の情報と、KIWCの活動を紹介する英文のポスターを作成し、会議会場に展示したほか、パンフレットやニュースレターの配布を行いました。なお、ポスター等の搬送や展示にあたり、構成団体であるNPO日本国際湿地保全連合のご協力をいただきました。



フォブジカ谷のオグロツル


百瀬 邦和氏
(国際ツルフォーラムにて)


国際ツルフォーラムへも参加(最前列)



(写真提供:日本国際湿地保全連合)